

シンクタンクを考える

開倫塾

塾長 林 明夫

1. はじめにー中国報告ー

- (1) 9月9日～10日に北京で開催された China Business Summit(チャイナ・ビジネス・サミット)に参加。主催は World Economic Forum(ワールド・エコノミック・フォーラム、毎年1月末にスイスのダボスで行われる「ダボス会議」の主催団体)。
- (2) 600名余りの参加者で、日本人は5～6名。
- (3) 欧米や東アジアの多国籍企業や機関投資家と、中国の政府要人・ビジネスマンが熱心に語り合っていたのは WTO 加盟後の中国のビジネスでの可能性でした。
- (4) 日本人の感覚と全く異なるのは、現在が中国投資、中国進出の“early stage(アリー・ステージ)”つまり初期段階であるという認識でした。WTO への加盟により、中国でも正常な取引が可能になりつつある今こそ、中国でのビジネス・チャンスと考えている参加者が大半でした。
- (5) この会議では毎年参加していますが、今年ほど実務的な議論がなされたことはありませんでした。なのになぜ日本からの参加者が極端に少ないのか不思議な思いがしました。

2. シンクタンクを考える

- (1) シンクタンクという新たな事業を行うにつき事業の継続性が第一に重要と考えるが、その判断基準として重要であるものは何か。
 - (ア) スタッフおよび参加者の政策提言作成能力の育成を活動の中心にすること。
 - (イ) ある特定分野の専門職業人に対する教育も活動の中心にすること。
 - (ウ) 研究所職員(スタッフ)の能力開発が絶えず行われること。
- (2) シンクタンク授業を行うについて最も気になること、気がかりなことは何か。
 - (ア) 家賃や人件費、広告宣伝、出版等にお金をかけないこと。放っておけば際限なくいくらでも出ていく項目にお金をかけ続けると、資金はいくらあっても足りず、あっという間に消滅する可能性が極めて大きいと思われるからです。
 - (イ) とりあえずは既存の事務所の一角を間借りするような形でスタートし、スタッフは関係者(関係会社)からの出向を仰ぎ、今までの人脈を活用して地道に活動を立ち上げ、研究成果や案内などは HP(ホームページ)でのみ公表したり、e メールを活用すればほとんど経費をかけずシンクタンクを実質上立ち上げることが可能で、長続きすると確信します。

(3)シンクタンクを活性化するために必要と思われること。

(ア)毎年1回はそれまでの研究成果を記者発表を通じてマスコミに発表できるまでの内容になるように、絶えず準備し続けると時代の要請に応えられると考えます。

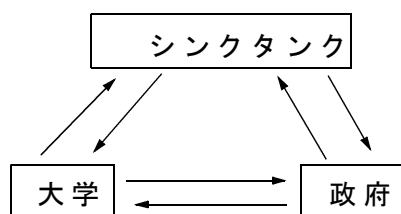
(イ)そのためには、TV やラジオ各局や、新聞各紙 共同や時事など通信社の論説委員や、外国マスコミの東京支局長などに、はじめからスタッフに入ってもらいとよいと思われます。

(ウ)政策は議論しているだけで実行されなければ意味をもたないので、自由民主党や民主党などからも何人かスタッフに加わってもらいとよいと考えます。

(エ)シンクタンクは、調査に基づいた議論と、議論に基づいた「政策」提言が本来のミッション(社会的使命)と考えますので、以上のような「広報」活動を行うことが望まれます。

3. おわりに ——大学等の高等教育機関との連携も——

(1)



シンクタンクは大学や政府(議会)と連携し関係強化してこそはじめて本来のミッション(社会的使命)を果たします。

(2)そこで、大学等の高等教育機関との連携をどのようにはかる、その具体的方策も絶えず考えることが求められます。

以上